

「揚州夢」の混淆性

福永美佳

一 はじめに

晩唐の詩人杜牧（八〇三～八五三、字は牧之）は、七言絶句「遣懷」（『全唐詩』巻五二四）において、自らの過去をふり返り、「十年一たび覺む 揚州の夢、贏ち得たり 青樓薄倖の名」、つまり揚州の妓楼にしばらく入り浸っているうちに軽薄な遊び人の名を得たと詠んでいる。風流才子の杜牧像は、後の小説や劇にも描かれている。元末の劇作家喬吉による雜劇「杜牧之詩酒揚州夢」（以下「揚州夢」と記す）もその一つである。

「揚州夢」の概要を以下に記す¹。杜牧は張紡の家で妓女張好好と出会う（楔子）。三年後、杜牧は牛僧孺の聞く宴会で張好好と再会する。牛僧孺は杜牧の軽薄さを嫌い、張好好に近づかせない（第一折）。杜牧は翠雲楼でまじろみ、夢で張好好と会う（第二折）。杜牧は白文礼の聞く酒宴に招かれる。白文礼に

仲人を頼み、都に帰る（第三折）。牛僧孺の帰京に伴い、白文礼も上京する。白文礼は宴席を開き、皆を集める。その場で杜牧は詩酒を断つことを誓い、張好好と結ばれる（第四折）。

士大夫と妓女の縁談というのは、雜劇のテーマとして目新しいものではない²。しかも「揚州夢」に先行して、杜牧には「張好好詩並序」（『全唐詩』巻五二〇）が伝わっており、「本劇は大筋は着實に根據に則してゐる、いはば解釋劇である」という見方もある³。つまり「揚州夢」は比較的よくある設定に、実在する人物をあてはめたと想定しうる物語なのである。にもかかわらずその人気は高く、「揚州夢」には八種のテキストが確認されている⁴。であれば「揚州夢」は、従来の杜牧像のイメージを損なうことなく、新奇性を出すことに成功しているということである。

本稿では、関連する詩や小説などの先行テキスト

を取り上げ、差異を明らかにすることをとおして、「揚州夢」が劇化される過程について論じる。本文の引用においては、正字・俗字を区別し、可能な限りテクストとおりに記載する。

二 張好好との出会い

「揚州夢」において、杜牧と結ばれる妓女の名は張好好という。張好好という名の妓女が登場する詩として、杜牧には先述の「張好好詩並序」がある。これは全二九十字からなる長篇の五言詩である。その序にいう。

牧、太和三年。佐故吏部沈公江西幕。好好年十三。始以善歌来樂籍中。後一歲。公移鎮宜城。復置好好於宜城籍中。後二歲。爲沈著作述師以雙鬟納之。後二歲。於洛陽東城、重觀好好。感舊傷懷。故題詩贈之。

序には、吏部の沈公のところでは張好好と出会ったことや、その後、沈述師が彼女を落籍したこと、だ

が数年後、洛陽で見かけたことなどが記されている。詩も序と同じく、かつて沈公の寵愛を受けていた妓女と、数年後に洛陽東城で再会し、彼女の儂い人生に心を傷めたというものである。

この序で注目したいのは、傍線を引く「好好年十三。始以善歌来樂籍中」（好好年十三。始めは歌を善くするを以て来たりて樂籍中にあり）という部分である。張好好の年齢及び歌が上手であった点について、序に続く詩では次のようにいう。

君爲豫章妹

十三纔有餘

（中略）

盼盼乍垂袖

一聲雛鳳呼

繁弦迸關紐

塞管裂圓蘆

衆音不能逐

裊裊穿雲衢

主人再三歎

謂言天下殊

贈之天馬錦

副以水犀梳

(以下略)

贈之天馬錦
堪賦水犀梳

この詩によると、豫章の妓女張好好は、年齢は十三・四歳、天に響き渡るほどの素晴らしい歌声を披露し、主人から激賞され、天馬の錦や水犀の梳といった贈り物を賜ったとある。

「揚州夢」の楔子には、右の詩をふまえていると思われる詩がある。それは、張紡の開いた宴席で、張好好的の歌舞を初めて目にした杜牧が口ずさむ、次の五言律詩である。

傍線を引いて示すように、「張好好詩」の一節と、「揚州夢」で杜牧に扮した正末がよむ詩には共通する部分が多く、特に冒頭の二句や、歌声を披露して贈られた褒美の品が一致している。したがって「揚州夢」が「張好好詩」をふまえることは明らかである。以上のことから、美貌と歌唱力を兼ね備えた十三歳の妓女張好好というヒロイン像は、まさしく「張好好詩並序」にもとづくといえる。一方で、この詩から杜牧と張好好との特別な関係性を見出すことは難しい。また、張好好を引き取っているのは沈氏である。もう一つ張好好を詠んだとされる「別贈二首」(『全唐詩』卷五二三)を取り上げたい⁵⁾。

汝爲豫章姝

十三纔有餘

嬌媚鵑鳩兒

妖嬈鸞鳳雛

舞態出花塢

歌聲上雲衢

娉娉裊裊十三餘

荳蔻梓頭二月初

春風十里揚州路

卷上珠簾總不如

多情卻似總無情

唯覺尊前笑不成

蠟燭有心還惜別

替人垂淚到天明

一首目では、十三歳余りの美しい少女を荳蔻の梢にたとえ、「卷上珠簾總不如」（珠簾を巻き上げるも總べて如かず）、すなわちいかなる妓女もこの少女にはかなわないと褒め称えている。二首目では、蠟が流れ落ちる様を涙に見立て、別れの悲しみを表現している。

このように「張好好詩並序」や「贈別」には、並外れた美貌をもつ十三歳ほどの妓女との出会いと別れについての感慨が詠まれている。同様に「揚州夢」においても、杜牧と妓女は何度も出会いと別れを繰り返している。

以上のことから、張好好にまつわる杜牧の詩は「揚州夢」の重要なモチーフとなっているといえるが、それ以外の場面にも、杜牧の詩はたびたび引用され

る。とりわけ「遣懷」は重要である。

落魄江南載酒行

楚腰腸斷一作纖細掌中輕

十年一覺揚州夢

贏得青樓薄倖名

この詩の承句は、「揚州夢」第四折【水仙子】にある「喜的是楚腰纖細掌中輕」（喜ばしいのは楚腰纖細にして掌中に輕し）という歌詞と一致する。また、つづく転句では、科挙に及第した後、江南各地で地方官を務めていたことが「十年一覺揚州夢」（十年一たび覺む 揚州の夢）という言葉で端的に表現されているが、いうまでもなく「揚州夢」という言葉は劇のタイトルと同じである。

三 牛僧孺との関係

では、「揚州夢」で杜牧の恋路を邪魔する牛僧孺は、どのようにして生まれたのだろうか。史実によれば、杜牧は牛僧孺のもとで淮南節度府掌書記を勤めてい

る。また、杜牧の「送牛相出鎮襄州」(『全唐詩』卷五二四)、「寄牛相公」(『全唐詩』卷五二七)などの詩から、彼が牛僧孺を慕っていたことがうかがい知れる。

唐代の于鄴(八一〇?)作『揚州夢記』には、杜牧に關するエピソードが三つ収められる。そのうち一つ目が牛僧孺に招かれ揚州に赴任したころの話である。それによると、杜牧は每晚妓樓へと足を運ぶ。牛僧孺は杜牧を心配し、密かに護衛を付ける。数年後、帰京する杜牧のために一席を設け、その行いを戒める。この後、二人の間で次の会話が交わされる。

牧因謬曰、某幸常自檢守。不至貽尊憂耳。僧孺笑而不答。即命侍兒取一小書篋、對牧發之、乃街卒之密報也。凡數千百。悉曰、某夕杜書記過某家。無恙。某夕宴某家。亦如之。牧對之大慙。因泣拜致謝、而終身感焉。

これによると、嘘でこの場をやりすごそうとする杜牧に対し、牛僧孺はまるで見通していたかのよう

な対応をとっていることが分かる。ここには、傍線で示すとおり「即命侍兒取一小書篋、對牧發之、乃街卒之密報也。凡數千百。悉曰、某夕杜書記過某家。無恙。某夕宴某家。亦如之」(即ち侍兒に命じて一小篋を取らしめ、牧に對して之を發けば、乃ち街卒の密報なり。凡そ數千百あり。悉く曰はく、某夕杜書記某家に過る。恙無し。某夕某家に宴す。亦た之のごとし)というように、大量の街卒の密報という証拠を提示したうえ、彼をたしなめる厳格な牛僧孺がいる。牛僧孺の行動は親切心から出たものである。とはいえ、杜牧の妓樓通いを邪魔する人物として認知されるには、これは十分に印象的な話といえよう。

因みに『揚州夢記』に収められる二つ目のエピソードとは、洛陽で李愿の開く宴席に参加したときの話である。その席で杜牧は「兵部尚書席上作」「遣懷」「題禪院」の三つの詩を口ずさむ。ただし、『揚州夢記』にみえる「遣懷」と、『全唐詩』収載の「遣懷」には、わずかな異同が生じている。例えば、承句の「楚腰纖細掌中輕」において、句末が「輕」ではなく、「情」であるという点や、転句の「十年一覺揚州夢」では「十

ではなく「三」であるという違いがある。この「三」という数字は、牛僧孺のもと揚州で過ごした足掛け三年、すなわち太和七年（八三三）から九年（八三五）までを指すともとれる。

そして三つ目は、太和の末、湖州刺史某乙の開く宴席に参加したときの話である。杜牧はここで十歳の余りの少女を見初め、十年以内に迎えに来るからと約束して湖州を離れる。その十四年後に湖州刺史として湖州に戻った杜牧は、以前約束を交わした女性と再会する。だが、彼女はすでに三年前に嫁ぎ、三人の子を持つ母となっている。

以上、唐代の小説『揚州夢記』に収められる三つの話はそれぞれ状況が異なるが、いずれも杜牧が妓楼に精通する人物であることを伝えるものである。しかし、ここでも遊興に耽る杜牧が話題となる一方で、妓女との縁談の成就は描かれていないのである。

唐代の高彦休（八五四〜？）作『唐闕史』にも、杜牧と牛僧孺に関する逸話が収められている。ただしこれは『揚州夢記』と字句レベルで同じものである。また宋代の王讜『唐語林』巻七には、『揚州夢記』

に掲載されるものとよく似た話が簡略化されて収められている。

つまり、杜牧詩が「揚州夢」に多く引用されるのとは対照的に、『揚州夢記』などの小説が直接引かれているわけではない。とはいえこれらの小説から、風流好みの杜牧像が広く定着していたことがうかがえるし、さらに、唐宋時代すでに軽薄な杜牧と、それをたしなめる牛僧孺という二人の関係が面白く物語化されており、これが元代以降においても影響力を持っていった可能性が十分に考えられる。しかも、書名に「揚州夢」を付した小説まで存在する。ただ杜牧が妓女との仲を成就させたという話は見当たらない。

したがって、「揚州夢」の成立以前に、杜牧及びその周辺に魅力的な素材が点在していたが、これらは短く、いうならば杜牧の放蕩三昧日々を伝える記事のようなものといえる。ところが、それらの素材を組み合わせ、杜牧の相手を務める魅力的な妓女として張好好を見出し、縁談の障害となる人物として権力者牛僧孺を据えた点に、「揚州夢」の独自性が認

められる。

四 おわりに

風流才子の詩人杜牧には、妓女や妓楼に関する詩やエピソードが数多く伝わっている。断片的に伝わっているものを、一貫性のある物語に仕立て上げるために、牛僧孺との対立を乗り越え、杜牧と張好手が結ばれるという解釈がなされ、これが物語の軸に据えられたことが、「揚州夢」の新しさにつながったといえる。

- 1 本稿は現存する「揚州夢」テキストのうち、最も成立の遅い、崇禎六年（一六三三）の序をもつ『古今名劇合選』収載「揚州夢」に拠る。
- 2 田中謙二「元人の戀愛劇に於ける二つの流れ」『田中謙二著作集』第一巻（汲古書院、二〇〇〇年）
- 3 波多野太郎「十年一覺揚州夢に就いて——讀書雜記——」『中国文学研究』第二十八期（二〇〇二年）
- 4 「揚州夢」のテキストは、『雍熙樂府』改定元賢

- 傳奇』『詞譜』『古名家雜劇』『楊夫人樂府』『繼志齋元明雜劇』『元曲選』『古今名劇合選』にそれぞれ収められる。テキストについては、福永美佳「明刊「揚州夢」版本における「維揚風月」の意義——「楊升菴重訂」の視点から——」『日本中国学会報』第七十号（二〇一八年）を参照していただきたい。
- 5 注（3）参照
- 6 例えば「題揚州禪智寺」などが挙げられる。
- 7 呉曾祺編輯『舊小説』乙集（上海商務印書館、一九一四年）所収。
- 8 李昉等編『太平廣記』卷二七三（中華書局、一九六一年）所収。
- 9 『景印文淵閣四庫全書』第一〇三八冊（驪江出版社、一九八八年）所収。